

# 日本社会心理学会会報

211号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会(担当常任理事:三浦麻子)

2016年9月21日

## 速報：第57回大会が開催されました

三浦麻子(大会準備委員長)

2016年9月17日と18日の2日間に渡り、兵庫県西宮市の関西学院大学(かんせいがくいんだいがく)西宮上ケ原キャンパスにおいて、**日本社会心理学会第57回大会**が開催されました。台風接近が懸念されましたが幸いその影響は少なく、ただし1日目は関西の夏再びを思わせる蒸し暑さ、2日目は時折強まる雨脚に、至極快適な日和とは残念ながらありませんでしたが、交通機関の乱れなどは特になく、無事に全日程を終えることができました。ご参加は、予約参加481名、当日参加265名、招待講演者・名誉会員・賛助会員等37名と、特に当日参加の多さが際立っていました。過去5年データを参考に、しかしペイズを使わずいい加減な推定でご参加人数の見込みを立てていたために、ネームホルダーや2日目のサンドイッチ等の不足でご迷惑をおかけした方々には深くお詫び申し上げます。



会報209号および210号でご紹介したとおり、今回の大会は、その場に集うすべての参加者が、学問という愉悦に没入することができる学堂を築き上げることを目標として、準備委員会が考えつく限りにおいて、社会心理学の現在を伝え、将来を議論できるイベントを盛り込みました。大きなテーマとして「学際性」を掲げ、研究成果の再現可能性を確保するためにわれわれは何をすべきかを考える招待講演と、比較認知科学と政治学という近接領域の研究者との密度の濃いやりとりを企図したシンポジウムをプログラムの核に据えました。また、学際・国際的にアクティブに活躍する会員に2つのワークショップを企画していただきました。どの企画も多くの参加者の聴講を得ましたが、2日間にその全てを押し込んだため、参加したかったのに叶わなかった、という方も数多くいらっしゃるかと存じますが、台風程度は何とか押しとどめられても、時の流れをコントロールすることはままなりません。テーマに込めた思いは、受付で冊子を配布した「**虎の巻**」[オンラインPDF](#)をご参照下さい。

また、研究発表は、口頭発表105件、ポスター発表296件のお申し込みをいただき、会場いっばいに議論の花が咲きました。初日は開催校の都合でポスター発表会場が手狭となり、決して快適とは言えない環境となってしまいました。お配りしたうちわが少しでも涼をご提供できていたならば幸いです。あのうちわは「都うちわ」といって知り合いの京都の職人さんに特注したもので、とてもしっかりした和紙と骨組みを使っています。これからも末永くご愛用いただければ幸いです。また、2つの口頭発表会場で会場係員不在というハプニングがあり、座長の方々に会場マネジメントを全面的に強いることになってしまいました。これは完全に大会準備委員会の指示不徹底によるものです。こうしたいくつかの瑕疵でご不快の念を抱かせてしまった方々には、改めて心よりお詫び申し上げます。

「やりたいと思うアイデアのうち、できると思ったものはすべて、できる限り良いクオリティでそれを実現させる」ことを旨としてまいりましたが、大会準備委員長がその任務に忙殺されることはなく、おそらく準備委員やポスドク・院生等の負担も(大会前日からの3日間は別として)大きくはなかったはず。明文化された業務マニュアルは一切作らず、学生スタッフは自主的に参加者のサポートや大会の盛り上げに協力してくれました。かれらのご不自由をおかけしたことがあったなら、その責はすべて私にあります。とにかかくにも、2014年12月に大会開催を打診された瞬間から、全プログラムを終えて会場を撤収解散した瞬間まで、最初から最後までとても楽しく企画・準備・開催ができたので、それが参加者の皆様にも少しでも伝わっていれば幸いです。およそ25年にわたってお世話になってきた日本社会心理学会に、これで少しはご恩返しができたでしょうか...

実施の詳細報告や会員による参加記は、次号に掲載いたします。ご参加下さった皆様、日本社会心理学会、同大会運営委員会をはじめとするすべての大会関係者に心から御礼を申し上げ、次年度の開催校にバトンを渡します。2017年10月28日と29日に、広島大学東広島キャンパスでふたたびお目にかかりましょう。

(みうら あさこ・関西学院大学)



Invited Lecture by Dr. Daniel Lakens



シンポジウム 社会心理学と政治学の対論



シンポジウム 比較することの意味と意義

# 日本社会心理学会第60回公開シンポジウム

## 「幸福感の社会心理学—富山県、福井県、石川県に住む人々の幸福感はなぜ高い?!—」

2016年11月19日(土) 富山大学人文学部

第60回公開シンポジウム準備委員会 黒川 光流(富山大学)

### シンポジウムへのお誘い

北陸新幹線の開業から1年半が過ぎました。富山県・石川県・福井県から成る北陸と首都圏とは約2時間で結ばれています。金沢以西の早期開業が望まれますが、既に関西とは特急サンダーバードで約3時間で結ばれており、北陸と東西日本の結びつきはさらに強固になりました。このような交通網の発達には、人、モノ、文化、そして経済の交流は盛んになり、北陸に住む人々の生活を豊かにすることが期待されています。

北陸は1年を通して雨や雪が降る日数が多く、日照時間は短いなど、生活をしないイメージをもたれがちでした。その一方で、女性の働きやすさ(女性の就業率)、教育に対する熱心さ(児童・生徒の学力)、持ち家比率や自家用車の保有率などは高く、生活をする上での快適さは以前から高かったことがうかがえます。

2011年に法政大学大学院の坂本光司研究室が発表した「47都道府県の幸福度に関する研究成果」では、幸福度ランキングの1位は福井県、2位は富山県、そして3位は石川県という結果でした。また、日本総合研究所による「全47都道府県幸福度ランキング」の2016年度版でも、福井県は2014年度に引き続き1位、富山県は5位から3位、そして石川県は6位から5位へとランクアップし、北陸3県が上位に位置しています。

いずれのランキングも、社会経済統計のデータを利用して順位をつけたものであり、主観的経験としての幸福を調査したものではありません。また、幸福度ランキングの上位であることと実感としての幸福度との乖離をどう埋めるかが重要な課題として認識されています。そのため、これらの結果は幸福の一側面を表しているに過ぎないのかもしれませんが、富山県、福井県、石川県に住む人々が、ある意味で幸福であることを示していると言えます。

本シンポジウムはまず、富山県在住の竹ノ山先生から、地域の中から見た地域の幸福という視点でお話していただきます。続いて、富山県出身の小杉先生から、地域の外から見た地域の幸福という視点でお話していただきます。最後に、内田先生に文化心理学の見地から学術的に地域の幸福についてお話していただきます。

それぞれの視点から話題提供していただき、地域の幸福について社会心理学的に考える機会にしたいと考えております。また、地域の幸福に対し、社会心理学がどのように貢献できるか考える一助となれば幸いです。皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げます。

お問い合わせはメールアドレス [kurokawa@hmt.u-toyama.ac.jp](mailto:kurokawa@hmt.u-toyama.ac.jp) までお願いいたします。 (くろかわ みつる・富山大学)

シンポジウム Web サイト: <http://www.socialpsychology.jp/sympo/sympo2.html>

\*\*\*\*\*

2016年夏、横浜と名古屋で2つの大きな国際会議が開催されました。多くの社会心理学者が自らの研究発表と各国の研究者との交流をし、また会議運営の中核をも担いました。ここでは、そんな方々の活躍を参与観察した、若手研究者によるレポートをお届けします。

## ICP2016 (第31回国際心理学会議) 参加記

鳥山理恵

本年7月末に世界各国から8000人近くの参加者を迎え、ICP2016がパシフィコ横浜で開催されました。4年に一度のこの学会、日本での開催は44年ぶりのことです。私はポスターアブストラクトの査読という形で大会に関わらせていただいていたのですが、やっぱり参加費5万は高いよなあ、ということで大会参加は諦めてしまっていました。そんな私がなぜ今こうして「大会参加記」を書いているのかと言いますと、それは1通のメールから始まりました。そうです、あの「ボランティア募集」のメールです。これまでに国内・海外の多数の学会でボランティアスタッフとして入ることで高い参加費から逃れていた私には格好のチャンス!というわけで、ICP2016にスタッフとして参加する運びとなりました。ボランティアスタッフのお仕事は、受付・会場・クローク、



日本社会心理学会 第60回公開シンポジウム

# 幸福感の 社会心理学

—富山県、福井県、石川県に住む人々の幸福感はなぜ高い?!—

開催日時 ● 2016年11月19日(土)  
13:30~16:30(開場13:00)

開催場所 ● 富山大学人文学部 第6講義室  
富山市五福3190

入場無料  
どなたでも自由に  
ご参加  
いただけます

シンポジスト ●

1. 竹ノ山圭二郎 富山福祉短期大学教授  
「高度差4000mの幸福: ニッポン的“富山人”と富山型福祉」
2. 小杉素子 静岡大学准教授  
「ふるさとの内と外: 幸福感はどこから来るのか」
3. 内田由紀子 京都大学准教授  
「地域の幸福とは何か: 文化心理学からの考察」

お問い合わせ ● 富山大学人文学部准教授 黒川光流 [kurokawa@hmt.u-toyama.ac.jp](mailto:kurokawa@hmt.u-toyama.ac.jp)

と多岐に渡るものでしたが、私は最高にラッキーなことに、Keynoteの先生方の対応というお仕事を頂きました。5日間27人の先生方のサポートの中で、Elizabeth Loftus先生に「偽りの記憶の実験のお話を心理学概論の授業で毎年紹介しているんです！」と話しかけて握手していただいたり、Carol Ryff先生には「私も最近 Well-Beingの研究を始めたんです」と自分の研究の話をさせていただいたり、とにかくいい思いをさせていただきました。運営委員の先生方やスタッフの皆様の御苦労はいかばかりかと思いつつも、タダで全てのKeynoteが聴ける上に先生方とお話もできるといふ、今思い返しても現実の物と思えないような貴重な5日間でした。

私自身は連日Keynote会場に張り付きだったので、他のシンポジウムなどを覗きに行かせていただく機会はほとんどなかったのですが(それでも秋篠宮妃殿下のご発表はちゃっかり聴きに行きました!)、プログラムを見る限り、今の心理学の全てがここにあると言えるような大変バラエティに富んだ発表の数々であったように思われます。国内の学会ではあまりメジャーではないテーマを専門としている友人たちも、「自分の分野のテーマだけでこんなにたくさん行くべきセッションがあるなんて！」と嬉しい悲鳴をあげており、日本にいながらにして現在のあらゆる心理学研究のトレンドに触れることができるというのは、このような大規模学会が国内で開催されるメリットの1つであろうかと思いました。Keynoteの中で特に印象深かったのがJane Goodall先生のお話です。さすが世界的に有名な先生だけあり、朝イチから1000人収容のホールで席を見つけるのが難しいほどの大入りとなったのですが、中でも、あるチンパンジーと飼育担当の方との絆にまつわるお話はとても感動的で心に響くものでした。最前列でお話を聴いていた私は終了後も感動で涙が止まらず、その後泣きながら誘導係をしていてとても恥ずかしかったわけですが、後日何人かの先生方と「やっぱりあれは号泣モノですよ！」と確認し合えたので安心した次第です(笑)。

また、今回の大会ではプログラムアプリがとても使いやすかったのも記憶に残っています。このアプリのおかげで20近い並行セッションの中で今自分がどこに行くべきかが一目瞭然、会場内の地図とも連動していて広い会場内でも目指す部屋にすぐたどり着けた、という方も多いのではないでしょうか。(個人的に)ショッキングだった出来事としては、ボランティアスタッフにはお弁当が支給されたのですが、少し遅い時間に取りに行ったら1つも残っておらず食いつぶされてしまったということがありました。(ここは社会心理学者の叡智を結集して、「目のポスター」など貼ってであると良かったのかも知れません)。運営委員の先生方やスタッフの皆様方、準備の段階から当日そして終了後までの絶え間ないご苦労の元に、今回の大会の成功があるものと思いますが、今回そこにボランティアスタッフとして関わらせていただき、素晴らしい体験をさせていただけたこと、心より感謝申し上げます。本当に楽しくて夢のような5日間を過ごすことができました、ありがとうございました！

(とりやま りえ・東京大学大学院医学系研究科)

\*\*\*\*\*

## IACCP2016 (第23回国際比較文化心理学会大会) 参加記

一言英文

International Association for Cross-Cultural Psychology (通称 IACCP)の2016年大会は、炎天下の名古屋中心街、WINC Aichiを会場にして開かれた。文化に関わる心理学者が協力して開催したこのイベントには、当初の予想をはるかに超える、世界56カ国からの参加者が集まった。大会の参加人数は1031名であり、参加者数の多い国は順に日本、北米、ドイツ、カナダ、中国、香港、オーストラリア、イギリスであった。

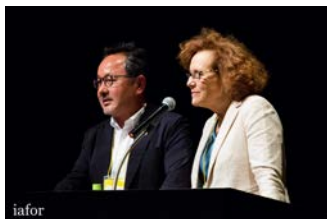


本大会のテーマは、“Honoring traditions and creating the future”であり、その名に恥じない発表ラインナップであった。キーノート・スピーカーにはEd Diener教授(幸福感)、Peter Richerson教授(進化)、Ying-Yi Hong教授(多文化アイデンティティ)、松見淳子教授(臨床・精神病理)が登壇され、それぞれに期待以上のクオリティの講演がなされた。



また、Laurence Kirmayer教授(文化精神医学)の講演やHazel Markus・北山忍両教授によるスペシャルセッションもあり、見応え十分であった。このラインナップからは、比較文化心理学の歴史をなぞりつつも、近年の新しい潮流 - 文化に対する進化・生物的視点に立った基礎研究から健康と心のケアの応用研究までを含む、文化研究の新たな展開と力強さを感じさせられた。それに呼応するかのように、本大会の発表にはこれらの伝統的、かつ先進的な視点に立ったAcculturation/Migration、Cultural/Social change、Development、Values/Norms、Well-being、Intergroup relations、

Organization/Work、Emotion、Educationなどの研究がシンポジウム(85件、およそ303件の話題提供)、ペーパー(251件、ラピッド・ペーパー136件)とポスター(279件)に散りばめられていた。各発表のクオリティはこれまでの大会の中でも最高峰といえるものであり、会場では「どのセッションに行くか迷うほどだ」「観光に行こうと思ったけれどもやめた！」といった声があちこちで聞かれた。国内外から



多くの参加者に支えられた本大会は、比較文化心理学の伝統と未来が垣間見える躍動感ある大会であった。個人的には、質疑応答で Diener 教授に幸福感の比較文化研究の意義についてお尋ねできたことと、自身が話題提供を行ったシンポジウム“Cultural constructions of well-being”も盛況であったことが収穫であった。



(撮影・有光興記氏)

本大会前にはサマースクール(Cognition in cultural context, The self and social inequality と、Acculturation & intercultural contact)が開催されており、53名の参加者(うち大学院生は45名、20カ国以上)が集まった。また、大会前日には2件のワークショップ(Cultural Neuroscience と Teaching Cultural Psychology)が開催され、参加者数は117名にのぼった。私はワークショップの先生方のアテンドを仰せつかり、北山忍教授や Beth Morling 教授の講義を聴講させていただく機会に恵まれた。

大会のビア・ガーデンでのディナーは、突然の集中豪雨に見まわれた。充滿する焼き物の煙と、今にも届きそうな空の雷、屋上ゆえに廊下に流れだした雨水の激流と、人々の笑い声に包まれた、大変メモリアルなディナーであった。大会委員長に後半の司会を言い渡された私は、緊張を解すため、ビールを片手にスーツ姿でディナー会場を歩いていた。IACCP に中国は西安で初めて参加した際、大御所の先生から「スーツを来てくるものじゃないよ、ここは友達を作る場所なのだから、カジュアルな格好でないと」と言われたことを、ふと思い出した。当時は知り合いなどいなかったが、あれから10年が経ち、今ではテーブルごとに声をかけてくれる友人ができたことが何よりも嬉しかった。比較文化研究は、よい知り合いが居なくては成立しない。世界中からの研究者が一堂に会することは、特にこの学会では必要不可欠なのだと感じた。



本大会では、政情不安のためにトルコからの参加者の多く(およそ20名ほど)が渡航を断念せざるを得なかった。文化の研究は、人間理解であるとともに平和を実現するための研究であると認識している。しかし、その営みもまた、人間社会に立脚しているのだということあらためて認識させられた。ポピュラーな主題を眺めれば分かるように、この学会は、このような現代の地球のために私達研究者ができる努力があることを教えてくれる。

最後になりましたが、大会委員長、Scientific Committee と Organizing Committee の先生方、スタッフの先生方、およびご協力いただいた学生の皆様に、こころ

より感謝申し上げます。特に先生方におかれましては、国際的な企業と連携しての学会運営について、文化を超えて大会を成功させることの難しさと、それを切り抜ける知恵を勉強させていただきました。知的好奇心と多様性に溢れた、とても楽しい夏を過ごさせていただきました。



(ひとこと ひでふみ・京都大学こころの未来研究センター)

(Photography by Thaddeus Pope, IAFOR Media. Copyright © 2016 The International Academic Forum (IAFOR))

\*\*\*\*\*

## 第4回春の方法論セミナー 開催予告

### 効果の科学からデータ生成過程の科学へ～心理学者のためのベイジアン・モデリング入門

2017年3月14日(火) 上智大学

岡田謙介(専修大学・心理統計)・国里愛彦(専修大学・計算論的臨床心理学)

清水裕士・竹澤正哲(新規事業委員会)

『最近、ベイズ、ベイズと世間がやかましい。でも正直な話、それを学んでどれだけ役に立つのだろうか』—そんな疑問を持つ方のためにデザインされたセミナーです。ベイジアン・モデリングをキーワードとし、ベイズを使うことの意義、ベイズが科学における新たな方法論であること、そして臨床心理学を例とした具体的な応用例を、とにかく分かりやすく紹介します。

MCMC(マルコフ連鎖モンテカルロ)という言葉はとにかくカッコイイと感じる方、そろそろベイズの全体像を把握したい方、心理学って効果の有無を問うだけで良いのか、と悩まれている方。多様な関心を持つ方々の期待にお答えします。

\*\*\*\*\*

## 会員異動 (2016年6月18日~2016年9月15日)

### 入会

#### 《正会員》

##### ・一般

足立英彦(東京大学大学院理学系研究科学生支援室相談補佐員)、飯塚有紀(仙台青葉学院短期大学こども学科講師)、川瀬隆千(宮崎公立大学人文学部教授)、畠山彰文(北海道医療大学心理科学部言語聴覚療法学科専任講師)、横山新一(明治大学特定課題研究所客員研究員)

##### ・大学院生

菅谷友亮(京都大学)、竹下隼人(大阪大学大学院人間科学研究科)、杜 健(九州大学人間環境学府行動システム専攻)、戸田晃太郎(京都橘大学大学院)

#### 《準会員》

蛭原かおり(特定非営利活動法人宮崎障害者雇用支援センター主任)

### 退会

應治麻美、川喜田水希、金 賢美、小綿藍子、佐伯政男、玉井 寛、永田麻里子、深谷博子、守 一雄、横田澄司(物故)、渡辺里絵

### 所属変更

福田 充(日本大学危機管理学部教授)、渡部敦子(福島学院大学福祉学部福祉心理学科准教授)、上出寛子(名古屋大学未来社会創造機構特任准教授)、平松隆円(東亜大学芸術学部准教授/Suan Sunandha Rajabhat University 客員教授)、佐藤重隆(株式会社マーケティング・サービス)、澁谷 覚(学習院大学)、李 楊(メルボルン大学)、井上裕珠(日本学術振興会・早稲田大学商学学術院)、沼田 潤(相愛大学共通教育センター准教授)、大貫真友子(Japan International Cooperation Agency, Research Institute (University of Tokyo) 研究員)、竹ヶ原靖子(東北学院大学学生総合保険支援センター)、下川照代(筑波大学大学院ビジネス科学研究科)

\*\*\*\*\*

## お知らせ

2013年2月21日に、名誉会員の横田澄司先生が逝去されました。横田先生は、主に産業・組織心理学分野(特に商品開発・管理)で多大なる業績をあげられ、明治大学経営学部等で長く教鞭をとられました。日本社会心理学会では第12~18期に理事を務められ、日本の社会心理学界に多大なる業績を遺されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

\*\*\*\*\*

## 『社会心理学研究』掲載予定論文

第32第2号(2016年11月刊行予定)

#### 《資料》

小宮あすか・唐牛祐輔・荻原祐二・後藤崇志「潜在的文化的自己観と親しい他者との協力-競争目標に対する選好」

第32第3号(2016年11月早期公開, 2017年3月刊行予定)

#### 《原著》

山岡 明奈・湯川 進太郎「マインドワンダリングおよびアウェアネスと創造性の関連」

\*\*\*\*\*

### 編集後記

第57回大会が終わりました。参加者の皆さんは、学問という愉悅に身をゆだねた心地よい疲労感に満たされていらっしゃるでしょうか。広報担当常任理事として、あるいはそれ以前には広報委員として、社会心理学界の動向を内外に向けてどう伝えるべきか、ずっと考えてきました。委員になった当初は学会 Web サイトのメンテナンスやメールニュースの配信登録等、やれと言われたことを淡々とこなせばよいと思っていたのですが、次第にそれでは広報という任を負う意味がないのではないかと思うようになりました。そうして考え続けてきたことのごく一部ではありますが、任期最後の年に大会開催という形で表現しようと試みました。それらの試みのうち一つでも、また少しでも、皆様の研究活動に対する知的刺激となっていれば幸いです。(asarin)